

# 心の和音を響かせる



人間が二人以上集まると、そこに社会が生まれます。人それぞれに性格や考え方の尺度は異なるものですが、私たちはつい自分の尺度を社会の基準と思いつ込み、他人を変えることに多大なエネルギーを注ぎます。しかし、そのエネルギーはかえって問題を複雑にし、人と人との和を損なう力となりかねません。異なる特性を持つ人と人とが歩み寄り、よりよい人間関係をつくっていくためには、どのような心づかいが必要なのでしょう。



## 彼さえいなくなれば……

「君の東口店にいる中山くんだけど、実は西口店で『ぜひベテランの彼に来てもらいたい』と言っているんだ。後任には必ず誰かを補充するから、よろしく頼むよ。十月一日付の異動になるんだが……」「『Iマート』に勤める澤田誠さん(37歳)

が、上司の岩瀬専務(58歳)からそう告げられたのは、九月半ばのことでした。戦後に町の青果店として創業した同社は、現在スーパーマーケットを経営しており、本店のほか、澤田さんが店長を務める東口店をはじめ四店舗を展開しています。

西口店は昨年オープンした、同社期待の  
新店舗です。

澤田さんは、岩渕専務の言葉に「承知  
しました」とだけ答えて、その場を辞し



ました。実のところ、澤田さんにとって  
は願ってもない話だったのです。

「中山くんがいなくなる……。これでも  
やく思いどおりの店づくりができるぞ」

野菜売場の主任の中山さんは、入社以  
来十五年、その道一筋のベテランです。  
ところが控えめな性格で口数も少ないた  
め、コミュニケーションを大切にして売  
場を活性化したいと考える澤田さん  
にとっては、悩みの種でした。なんとか中  
山さんの姿勢を変えさせたいと思い、意  
識して声をかけたり、店長としての自分  
の方針を繰り返して伝えてはきたものの、  
なかなか期待どおりにはいきません。野  
菜以外の売場がどんどん活性化されてい  
く中で、澤田さんは日増しに中山さんを  
責める心を募らせていたのです。

# みんなもつとせつてほつこ

十月に入ると、西口店へ異動になった中山さんの代わりに、同業他社から転職してきた小川さん（30歳）が配属されました。

家族の都合で地元の「Iマート」に勤め先を移した小川さんは、明るい性格とキビキビした働きぶりで、すぐに野菜売場に溶け込みました。さらに、小川さんは以前の勤め先での経験を生かし、売れ筋商品の欠品防止や仕入れの効率化を図る方策なども提案しました。

「よし、上半期の不振を挽回するぞ」  
中山さんの異動で心配が解消されたう

え、小川さんという片腕を得た澤田さんは、自分の思うように店内の改革を進めていきました。

ところがです。

新任の小川さんの目覚ましい働きで、次々と新しい構想が動き出す中、澤田さんには、それまで頼りに思っていたほかの従業員の働きぶりが物足りなく思えてきました。



「小川くんが入って、店がいつそうよくなる絶好の機会なのに、みんな今ひとつ熱意を感じられないな」

「特に中堅の野口くんには、こんなときこそ先頭に立ってみんなを引っ張ってもらいたいのに……。先輩格である彼の腰が引けているから、みんながついてこないんだ」

野口さんは、つい先ごろまで、澤田さんが特別目をかけていた部下の一人です。小川さんの着任を境に、澤田さんには、以前なら気にならなかつた野口さんのちよつとした言動やミスが、だんだんと気になり始めました。野口さんに対する視線は日増しに厳しくなり、いつしか「野口くんさえいなければ……」という思いが芽生えていました。



# わずか数か月の心変わり

「最近、特に仕事が大変みたいね」

ある夜、帰宅した澤田さんのコートをハンガーにかけながら、妻の京子さんが声をかけました。時計は十時を回っています。

「うん……。最近朝の隼人のおしめ替えも京子に任せつきりで、ごめん」

「私は大丈夫。それよりあなたが心配で。いい人がお店に入ってくれたって、この前はすごく喜んでいたのに、近ごろ笑顔が少なくなった気がして」

京子さんは出産を機に退職するまで、澤田さんと一緒に「Iマート」で働いて

いました。店のようすや同僚のこともよく知っている京子さんに、澤田さんは思わず愚痴をこぼしました。

「実は最近、うまくいかないことが多いで……。転職してきた小川くんは、本当によくやってくれているよ。だけど、ほかのみんながね……。力を合わせたら、ライバルのCマートを抜いて地域で一番になれるチャンスだっていうのに」

そう言いながら、澤田さんは食卓につきました。

「お店、大変そうね……。でも、野口さんがいるじゃない。彼がいなければ店は

もたないって言っていたわよね」

「野口くん？ ああ、彼については少し



買いかぶっていたよ」

「何かあったの？」

「何かって、特別なことがあったわけじゃないけれど……。とにかく、彼はもつとやってくれると期待していたんだよ」

「そう……。野口さんって、いつも職場を盛り上げてくれるイメージだったけれど。今日も私と隼人を見つけるなり、出かけるところみたいだったのに、わざわざ車を寄せて声をかけてくださったのよ」

「誰だつて挨拶あいさつくらいはするだろう」

「そんな言い方……。なんだか野口さん、かわいそうだわ。変わったのは野口さんじゃなくて、あなたの心じゃないの？」

澤田さんは黙だまって寝室だまに入り、体を横たえました。頭の中には、京子さんが最後に言った言葉が響ひびいていました。

# 熱心さの弊害

小川さんが店に加わってから四か月が経った、二月のある日。澤田さんは「I マート」の本社に岩瀬専務を訪ねていました。

「澤田店長の店は、好調のようだね。小川くんも活躍しているそうだし」

「ええ。即戦力どころか、うちの店では欠かせない存在となっています。いい人材を配属してくださって、専務には感謝しています」

岩瀬専務はにつこりしました。その笑顔につられて、澤田さんは「ただ、一つ懸念があります……」と、かねての思





いを打ち明けました。

「実は、ベテランの野口くんの腰が引けているせいか……今ひとつ、改革が波に



乗らないんです。もう少しでライバルのCマートも追い抜けるというところなのに」

「野口くん？ 君はついこの間まで〃次の店長候補だ〃って惚れ込んでいたじゃないか」

「ええ、まあ。でもこの半年ほどは、いいところがほとんどなかった気がします。私の買いかぶりだったのかもしれない」  
それから澤田さんは、思いつく限り野口さんの短所を語りました。

「彼さえいなければ、うちの店は……」  
「もういいよ、澤田店長」

言葉（ことば）を遮（さ）るように専務（せんむ）が声を上げ、澤田さんの顔（かお）を見据（み）えて言（い）いました。

「野口くんは動かさない。どうしても店の中（うち）がうまくいかないと言うなら、君に

よそへ移つてもらうことにするよ」

「え!？」

しばらくの沈黙の後、岩渕専務が口を開きました。

「……実のところ、中山くんを西口店に移したのは、もう澤田店長の下では働けない。会社は好きだが退職したい」という手紙を受け取ったからなんだ」

驚いた表情の澤田さんに対して、岩渕専務が言葉を継ぎます。

「澤田店長、今の状況は、熱心さの弊害、へいがいかもしれないな」

「熱心さの? どういう意味ですか」

「君が店をよくするために頑張がんばってくれていることは、私もわかっているよ。けれどもそれが行き過ぎて、自分だけが頑張っている」という気持ちになつていな

いか。ほかのみんなもそれぞれに努力しているのに、君と同じだけの頑張りを強要されたら、どんな気持ちになるだろう。君は一生懸命いっしょうけんめいになるあまり、考え方や歩調の異なる人を受け入れる心のゆとりをなくして、みんなのいいところが見えなくなっているんじゃないかな」

澤田さんの臉まぶたの裏うらに、中山さんや野口さん、そしてほかの従業員の悲しそうな表情が浮かんできます。岩渕専務の口調は、いつしか教え子を論ろんすようなものに変わつていきました。

「熱心さは時に、心を固く、狭せまく、高慢こうまんにしてしまうことがある。君はこれまでみんなを活気づけながら、店をまとめてきたじゃないか。君には期待しているんだよ」


# 心の均衡を 取り戻す

どんなに澄んだ音色を出すピアノも、内側にある弦のバランスが崩れると、正しい音が出せなくなってきました。

ピンと張ったピアノの弦には、この緊張を解こうとする作用から、徐々にゆるみが生じていきます。また、周囲の温度や湿度の変化なども影響するため、どれほど万全を期しても、やがて音が変わってしまふのだそうです。

私たち人間の心もこれと似ています。熱心さや克己心は、私たちが目の前の困





難を乗り越えて成長していくためには欠かせません。一方で、緊張と興奮にさらされ続けた心は、普段のゆとりや周囲との調和を失っていくことがあります。

澤田さんの心も、ピアノの弦のように均衡を崩してしまつたのでしょうか。

私たちは心のゆとりを失つたとき、自分ではその異状になかなか気づくことができないようです。そればかりか、周囲に不協和音が生じると、他人こそが原因と考えて犯人探しを始めがちです。そうすることによって、人間関係の不協和音はますます広がるのです。

ピアノが調律によって正しい音のバランスを取り戻すように、私たちも日々乱れを生じる心の均衡を、意識して取り戻す必要があります。

# 気づきにくい 『我』



物理学者で名随筆家としても知られた寺田寅彦は、「調律師」と題する短文の中で、次のように記しています。

「狂つたピアノのように狂っている世道人心を調律する偉大な調律師は現われてくれないものであろうか。(中略) 調律師の職業の一つの特徴として、それが尊い職業であるゆえんは、その仕事の上に少しの『我』を持ち出さない事である。音と音とは元来調和すべき自然の方則をもっている、調律師はただそれが調和す



るところまで手をかして導みちびくに過ぎない」

私たちの人間関係の不協和音の原因、それは「おれが、私が」という「我が」にあると言えます。私たちの日々の生活は、さまざまな人との関わり合いの中で成り立っています。そこで自分一人の思いや都合にこだわり、周囲に一方的な我慢や努力を強しいれば、当然、不協和音が生じます。私たちは、人に冷たくしたり辛づく当たったりするのはよくないことであると知っていますが、物事に一生懸命になればなるほど、視野しやが狭せままってくることも多いのです。周囲との関係がギクシャクしてきたら、そのときは熱心さのあまり「おれが、私が」という「我が」が膨はらみ、周囲の状況や心情を冷静れいせいに思いやれなくなっている可能性があります。

# 人の美点に目を向ける

岩瀬専務と話をした翌朝、澤田さん

は、あえていつもと違う道を選んで店へと向かいました。住み慣れた地域も、いつもの道を一本外れるだけで、まったく違う表情に感じられました。心の中は、まだ晴れていません。ただ、時間が経つにつれて、自分の不安や苦しさの原因を他人に転嫁し、相手の欠点を責めるだけで、人の美点に目を向けてこなかった自分の至らなさが悔やまれてくるのでし

た。

道の先に店が見えてきたとき、元気な声が響きました。

「澤田店長、おはようございますっ」

振り返ると、そこにはにこやかな野口さんの姿がありました。

「今度のセールですが、ぜひ特売に加えたい商品があつて……」

「おもしろそうだね。さっそく中で打ち合わせをしようか」

